



国連で活躍する 若き会計士たち



国際連合世界食糧計画(WFP)

山崎 頼良 Raira YAMASAKI (写真左)

高校時代はアメリカ、大学では台湾の留学を経て有限責任あずさ監査法人入所。同法人では、英語、中国語を伴うグローバル企業の法廷監査およびリファード監査を担当。その後、外務省JPOプログラムにより国連世界食糧計画ローマ本部へプロジェクト財務報告担当として赴任。2018年8月より同機関日本事務所において、民間企業連携による支援の開拓を中心に政府との連携を担当。特にブロックチェーン、IoT、AIなどのテクノロジーを用いた途上国支援に注力し、日本企業の技術などを途上国へ送り出すことを目標に活動中。

国際連合食糧農業機関(FAO)

林 直人 Naoto HAYASHI (写真右)

監査法人トーマツにて監査およびIFRSアドバイザー業務に従事した後、国際協力機構(JICA)インドネシア事務所では無償・技術協力(海賊対策)および円借款(鉄道事業)を担当。現在は国際連合食料農業機関(FAO)財務部にて、プロジェクトごとに組成するトラストファンドの監理を行っている。公認会計士(日本)、米国公認会計士(ワシントン州/License)、システム監査技術者(日本経済産業省)。

—お2人が国連に勤務するようになった経緯からお聞かせいただけますでしょうか。

山崎 あずさ監査法人に入所し、自らが志望して国際部に配属。そこでグローバルに展開する日本の上場企業および日本にある海外子会社の監査業務に従事していました。その後、国際財務報告基準(IFRS)を導入する日本企業のアドバイザー業務に従事。特に英語のマニュアル作成については、楽しみながら取り組んでいましたね。もちろん、海外出張も多く、様々な経験を重ねました。多くの会計士の方がそうかもしれませんが、入所して3年が経過し、会計士の修了審査があるあたりで、「次のステップをどうしようか?」と考えるようになっていました。ちょうどその時に、たまたまUSCPAの資格を持つ大学の先輩が国連で働いている話を聞いて、「なるほど、そういう道もあるのか?」と思いました。実は、高校生の時に留学を経験していて、当時から、将来は国際的な仕事してみたいという漠然とした憧れを抱いていました。特に国際機関で働くのって、単純にすごそうだなと思っていたので、先輩の話を聞いて大変興味を持ちました。当時応募基準を見たときに、ものすごくハードル

が高いと感じました。大学院レベルの専門知識と英語に加え、第2外国語もマスターしていなくてはならないというものでした。でも、先輩の話を聞いて「もしかしたら今の自分ならチャレンジできるのではないかな?」と思い、外務省が実施しているJPO派遣制度プログラムに応募したら、割ととんとん拍子で決まってしまう…。お世話になったあずさ監査法人を、ちょうど4年目の途中でやめて、2014年にローマにある国連の食糧支援機関であるWFPに移ってきました。WFPの基本的な活動は、例えば世界中で起きている紛争による難民問題に対する支援や地震・台風・洪水・干ばつなどの災害地へのサポートを実施するというものですが、そのプロジェクトごとに必要な資金は、ゼロベースで各国政府からのファンドレイジングによって調達しています。現在(2018年8月前半まで)所属している部署では、そのお金をどのように使ったのかを各国に報告するリポートを作成しています。

林 私は山崎さんのように外務省派遣ではなく一般公募を経て国連職員になりました。以前は監査法人トーマツで監査およびIFRSアドバイザー業務に従事してい

ました。監査法人時代の語学研修をきっかけに米国公認会計士(USCPA)も取得していたので海外に対する思いはもともとあったのかもしれませんが。国際協力業界に足を踏み入れたきっかけは「経済大国インドネシア」という本に出会ったことでしょうか。本屋で平積みされていた本を何気なく手にとった際、何かこみ上げるものを感じたことを覚えています。その後、著者の佐藤先生のオフィスまで押しかけてしまい、いろいろと興味深いお話もお伺いすることができました。そんなとき、国際協力機構(JICA)がインドネシアでのポストを公募していることを知りました。さっそく申し込み、面接ではこれまでの経験と自分のインドネシアに対する思いをJICAにお伝えしたところ、運よくインドネシアに派遣していただけることになりました。JICAインドネシアでは、無償・技術協力(海賊対策)、円借款(鉄道事業)を担当させていただきました。海賊対策はマラッカ・シンガポール海峡に出没する海賊を監視支援するという仕事です。もしかしたら、海賊退治に関わった公認会計士はあまりいないかもしれませんがね(笑)。一方、鉄道事業では円借款で開発されている鉄道事業を、主に資金面から監理していました。国家事業なの

で私の担当だけでも1,500億円相当の規模があり、スケールの大きさに驚いたものです。仕事にはやりがいを感じていましたが、いいことばかりではなく、任期中ISISのテロがあったり、贈収賄事件に巻き込まれたり、腸チフスにかかったりといったこともありました。が、終わってみればみな良い思い出です。特に日尼両政府のいろいろな方々に大変可愛がっていただき、素晴らしいご縁をたくさんいただくことができました。そうこうしているうちに、私の任期が近づいてきます。当時お世話になっていた在尼日本大使館の方に「これからどうするの?」と言われて、はたと現実に引き戻されました。その際、大使館の方から国際機関の存在を教えていただき、せっかく国際協力業界に足を踏み入れたのだから、もうちょっと寄り道してみようかなと、国際機関に応募することにしました。とは言いながら、一般公募での採用は本当に狭き門のようです。最初の頃はいくつものポジションに応募しても返事すらいただけない状況でした。その後、運良く人事コンサルタントの方の支援を受けて応募書類等の見直しをした結果、面接に呼んでいただけるようになったものの、そこで国際機関採用の厳しさを身をもって知りました。ある国際機関の面接でお伺いしたところによると、1つのポジションに対して約800名の応募があるとのこと。それも海外の有名大学(修士・博士)を卒業して、素晴らしいご経歴をお持ちの方々との競争になるとのことでした。ちょっと私は場違いなのではないかなと思ったのですが、先方からは監査経験のある公認会計士ということで、適性がある程度明確なこと、官民両方の経験をしていて開発途上国の経験があるのはちょっと変わっていておもしろかったから呼んだんだよ、とコメントいただいたのを覚えています。正直に言えば、日本人を求めているから、というも主な理由のようでした。最終的に、FAOにお世話になることになるのですが、採用に当たっては、私個人の力によるものではなく、日本外務省および在伊日本大使館の方々のお力添えをいただいたことが決め手であったこと

は間違いありません。FAOでは、プロジェクトごとに組成するトラストファンドの監理を担当させていただいています。具体的にはアジア(日本・中国・韓国)およびマルチ・ドナープロジェクトを資金面からサポートしています。特に日本との関係では外務省やJICAなど旧知の方とお仕事させていただくこともあり、これまでのご縁に感謝しながら仕事をしています。

山崎 1冊の本から人生が変わるという経験は、実は私にもあります。会計士になる前、学生時代、台湾に留学していた時に、「将来どうしよう?」と思いを巡らせていた頃の話ですが、台北の書店でその1冊に出会いました。当時の台湾企業はものすごく勢いがあったので、台湾ビジネスについてもっと知りたいという思いで、日本人が書いた台湾ビジネスの本を手に取りました。巻末の著者紹介を見たら、台湾在住のデロイトの方で、そこにメールアドレスが記載されていたんです。ダメ元でメールをしたらご返信をいただき、わざわざ時間を作って会ってくださったのです。その時に「日本人として海外で働きたいと思ったり、海外ビジネスに興味があるのなら、日本の会計士の資格を取得する選択が良い」とアドバイスをいただきました。それまでは、会計士に興味を持っていたものの、自分には無理だと思っていたのですが、そんなにすごい人が言ってくれるのなら頑張ってみよう。それが結局、日本の公認会計士を目指す原動力になり、あずさ監査法人に入るきっかけになったのです。

—そもそも会計士に興味を持ったのは、どのようなきっかけから?

林 私はいわゆるバブル崩壊後の就職氷河期に大学を卒業したので、就職することができなかったんですね。先に公認会計士2次試験に合格していた私の友人によると、会計士試験に合格すれば就職先がいくらかもあるよと。結果的には合格するまでに長く苦しむことになりましたが(苦笑)。

山崎 私の周囲には公認会計士の資格を取るといような友人はおらず、語学スキルや実力で外資系企業や日本の商社やメディアやコンサルといった企業の内定をいとも簡単に得ていました。留学して1年遅れで大学を卒業することになると、日本の場合、就活が一斉にはじまるので、どうしても乗り遅れてしまって、“もうおしまい”と、弾かれてしまうという傾向があります。どうしようかと迷いがあった時に、例の台湾での出会いがあって、その方がロールモデルになったんです。大きな影響を受けました。

—現在のお仕事でやりがいを感じているポイントについてお聞かせください。

林 国連という組織に対していろいろ意見があることは存じていますが、国連の存在意義もまだまだあるように思います。「国際機関で特定の国に肩入れすることはいかがなものか」とご意見いただくやもしれませんが、日本の皆さんの血税が投入される以上、1人の日本人として何かできることがないか、と自問自答しながら業務遂行しています。一方で、国際機関から日本に対する高い期待を感じることも確かです。こういったご期待に対して資金面だけではなく、人的な貢献をすることで日本のプレゼンスを示すことできるのではないかと考えています。

山崎 私も林さんと同意見です。日本人が国連という組織の中でプレゼンスを発揮できるというのはとても意味があると思っていますし、その一部を担っていることにやりがいを感じています。個人レベルでは、やはり日本の東京にいたら、なかなか見ることができない景色がここにあると思います。会計という観点からすれば、最先端は資本市場にあって、確かにそこから離れた場所にいるかもしれません。しかし、国際政治という意味では、今どういった危機があって、各国政府はどういう風にお金を出しているかというのがわかるし、経済を動かしているのは資本市場でも国際政

治はヨーロッパが動かしていたり、アメリカが引っ張っていたりします。要するに会計士の経験と国連の経験を活かすことで、違う世界が見えてくるという点に魅力を感じています。いろいろな国の人と一緒に働けますし、ウルグアイ、キルギスタンとかアフリカの国々の方とか、日本にいたらなかなか一緒に仕事をする機会も持てないような人たちとのコミュニケーションにも刺激を感じています。

林 公認会計士の資格を持っていて良かったと思うのは、ほとんどすべての国際機関で会計・監査に関連する仕事があることでしょうか。お伺いした話ですと、例えば気候変動に関するポジションはすべての国際機関をあわせても年に数件しかないということもあるようです。ただ、数多くのポストが出ていたとしても採用されるかどうかは別の話で、こればかりは何とも言えません。

山崎 確かに会計士ってわかりやすいスキルですよね。資格がないと、そこで足切りされるケースは往々にしてあります。あると逆に誰も文句が言えない(笑)。

一反対に、国際組織だからこそ難しいと感じられたこと、そしてそれらにどのように対応されていらっしゃるか共有いただけますでしょうか。

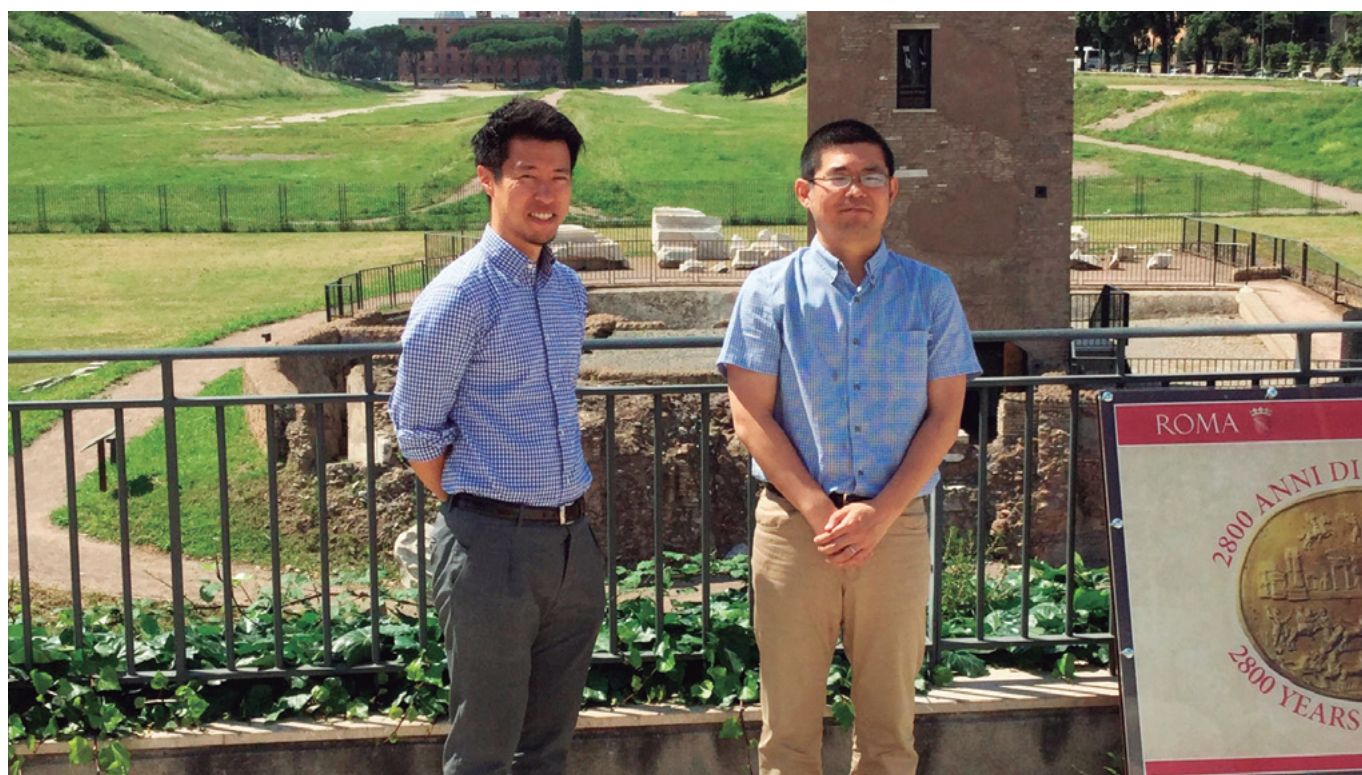
林 私はJICAを経由して国連で働き始めましたので、最近何となく両者の違いを意識するようになってきたような気がします。JICAだと主に2国間協力がメインになりますので、日本と援助国に気を配れば事足りるのですが、国連だと多国間協力になりますので、その他の国々にも配慮しなければならないようです。いずれにせよ志は同じであると信じていますが。

—今後のビジョンをお聞かせいただけますか？

林 あまり大きな声でいうことではないのですが、私は長期ビジョンを持つことがどうも苦手で(苦笑)。机に座っているいろいろと将来を思案するよりも、足を動かしているいろいろな人に会いに行くほうが性分に合っているようです。国連で働くことも当初はまったく想定していなかったわけで、こればかりはご縁なのかもしれません。ただ、監査法人時代に大変お世話になった方に

いただいた言葉にずいぶん助けられました。それは「人生ではいろいろ悩んだり、道に迷ったりすることもあるだろうけれど、そんな時は、心がワクワクするほうを選びなさい」ということです。その時々では意識していませんでしたが、今振り返って見ると、確かにワクワクする方を選んできたように思いますし、そういった気持ちで働いたほうが人生の満足度も高いような気がします。次にワクワクするようなことがあったらまた考えるかもしれませんが、今のところは明確なビジョンはありません。

山崎 基準は林さんと一緒です。自分自身、それぞれの分岐点でワクワクするほうを選んできたのは間違いありません。これから東京に戻って、企業連携の仕事に関わっていくことになります。これも、官と民が連携しながら貧困に苦しむ人を救っていくという、新たなモデルを構築したいと思っていて、そこにワクワクを感じたのでお引き受けしたという経緯があります。そして日本の企業にもメリットが生じるような、そんな流れを作っていきたいですね。



林 よくわかります。“魚をあげるのではなく魚釣りの仕方を教える”ではないですが、国際協力が終わった後も、援助国の方々が自活できることが大切なのかもしれませんね。そのため、最終的にはビジネスとして成り立っていくこともひとつの形なのかもしれません。

山崎 私が台湾にいたときも、結構そう言ったことを感じていました。当時の日本はまだレガシーにすぎっていた状態にあって、台湾や韓国に一気に抜き去られてしまった感のあった時期。ちょうど向こうにいたので、その考え方の差を明確な形で目の当たりにしました。当時の台湾企業はいかに安いコストで仕事を引き受けながら自分たちが利益を残し、生き抜いていくかについて真剣に考えていました。日本の家電メーカーのPCのシェアがものすごく高かった時にマイクロソフトと連携して新しいプロジェクトを立ち上げるような、そんなしたたかさを持っていました。それはたったの100ドルで、しかもハンドルを回して発電しながら使用できるPCで、最終的にはアフリカの国々の教育に役立てるというものでした。薄利多売でも新興市場で先行者の利をとるという日本企業にはできないことを画策していました。もちろん、それは国策として企業と官が連携して進めていったからこそその成果です。企業からすれば、決して援助という観点で始めた訳ではなく、利益の確保が目的であったにも関わらず、結果的に国際支援につながっていきました。こういう流れを作っていきたいですね。

—ありがとうございました。最後にこれから会計士を目指す方、そして若手の会計士の方に向けてメッセージをお願いしますでしょうか。

山崎 先ほども申し上げたように、“ワクワクする気持ち”をベースにしながらか動くのって結構間違いないと思います。私はそれが原動力となり、ここまで突き進んできたので。

林 国際協力の世界に飛び込んで気づいたのは、日本人の勤勉さ、すばらしさです。普段何気なく日本で過ごしていると見過ごしてしまいそうですが、当たり前のことか当たり前でできているという状況がいかにすばらしいことなのかを実感する毎日です。勢い余って日本の会計監査の世界を飛び出してしまいましたが、これまでのすべてのご縁に心から感謝しています。最後に、これから国際機関で働く方々へ私がローマへ赴任するにあたり、ある方からいただいた言葉をご紹介します。「多くの人が望んでもとどり着けない大儀あるお役目かと存じます。ご活躍を祈念しています」。いつかどこかでお仕事をご一緒できることを楽しみにしています。

山崎 そうですね。きっかけはやはり、そういった“人の縁”だったりしますので。特に海外で仕事をするうえでは、重要な要素だったりするかもしれません。

このインタビューは2018年5月26日に実施されました。



〒102-8264 東京都千代田区九段南4-4-1
TEL:03-3515-1120(代表)
03-3515-1130(国際グループ)
<http://www.hp.jicpa.or.jp/>